

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 60

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 1181. 知識と経験のネットワーク
- 1182. 表現の不可能性とそこから
- 1183. 病理と個性
- 1184. 根底変容
- 1185. 自己と集合を冒涇する日本語に無自覚な日本人
- 1186. 慟哭
- 1187. 徹頭徹尾の一貫性
- 1188. 能力開発と能力測定の誤解
- 1189. 『成人発達理論による能力の成長』: 高度な能力と具体的な行動との関係性
- 1190. 刻印と刻成
- 1191. 発達の律動と発達の淵
- 1192. ライデン訪問に向けて: 「スピノザ記念館」と「国立古代博物館」
- 1193. 「測定主義」の危険性
- 1194. 『成人発達理論による能力の成長』: 能力という生態系の危機
- 1195. 夏季休暇の始まり
- 1196. ライデン訪問記
- 1197. ライデン訪問から一夜が明けて
- 1198. 精神療法の負の側面
- 1199. ライデン訪問記: 長大な時間をかけて積み上げられたもの
- 1200. ライデン訪問記: 「国立古代博物館」を訪れて

ここ数日間は、早朝の日課であるカントの哲学書の音読と、就寝前の作曲の学習と実践を意図的に控えている。二つの最終試験と共に、一つの論文提出が迫っていたからである。

最終試験の準備の過程で論文を音読し続けることを行っていたが、やはり早朝に哲学書の音読をするという日課には、特別な意味と作用が含まれているように思う。また、作曲の学習と実践をここ数日間はどうしても控えなければならなかったが、それに関しては目立った問題などは浮上していない。やはりそれは、自分の内側で作曲の実践体系が構築されておらず、内側の現象に支障をきたすような次元での継続的な取り組みが、まだ行えていないことを示唆しているように思えた。

月曜日の午後に全ての最終試験が終わるため、そこからは作曲にせよ、早朝の哲学書の音読にせよ、これまでの日常と全く変わる事のない日々の過ごし方になるだろう。だが、一つだけこれまでと異なることがあるとすれば、それはやはり、最終試験を終えた日から始まる夏季休暇における、自分の主題の徹底的な追求だろう。これまでの自分を根底から覆すほどに、論文と専門書を読み進めていこうとする気概がある。

この夏の過ごし方は、おそらく今日のランニングの時に現れた100歳の自分からしてみれば、非常に滑稽な形で時間を使っているように思えるかもしれない。だが、私はこれを必ず完遂させていかなければならない。これまでの知識と経験の体系を、全く次元の異なる場所に配置し直さなければならないことをひしひしと感じている。それは望むと望まぬとにかかわらず、それを行おうとする意志の有無にかかわらず、それが迫ってきているのだ。

それを避けることは全くできず、私にはそれを避けるような手段も残されていないように思える。残されているのはそれに立ち向かう手段だけであり、それは、これまでの自己の根底を覆すほどの投入量と切迫感を伴った、実存的な読書にある。月曜日の最終試験の終了の合図とともに、その試みを開始したい。

夕食前に書き留めていた続きとして、私たちの能力は、知識と経験の緻密なネットワークを形成するという点も見過ごすことができない。第二弾の書籍の中では、「人とは何か？」というテーマについて、いくつかの回答事例を示したが、これはあくまでも一例に過ぎず、それらの回答が心理学的、も

---

しくは哲学的な領域のみに立脚していたことに気づくのではないだろうか。実際には、この問いに対して回答するときに、回答の立脚点は様々なものがある。生物学的な領域、歴史的な領域、社会的な領域など、多様な領域に立脚して回答することができるだろう。

私たちは、一つの事象を深く捉えるようになればなるほど、それを複数の観点に立脚する形で知識と経験のネットワークを形成するようになる。また、本書の中で扱った会計学の例を思い出してみると、実際には財務会計と管理会計の中にさらに細かな項目が存在する。そうした項目の一つ一つの知識と経験のネットワークの網の目を広く・深く張り巡らせていくことによって、専門領域や関心領域における能力は複雑高度なものになっていく。さらには、多様な領域を越境できるような専門家は、こうした知識と経験のネットワークを複数の領域で構築していると言えるだろう。2017/6/16

### 1182. 表現の不可能性とそこから

第二弾の書籍が世に送り出されて間もないためか、少しばかり周辺が慌ただしい。日々のやるべきことに集中するために、これから様々なことを整理していく必要がある。特に、世に送り出された書籍とこれからどのように付き合っていくのかに関して、少しばかり考えなければならない。様々な点において、これから少しずつ書籍から手を離していくような動きを見せていく必要があるだろう。そうすれば、徐々に周辺に落ち着きを取り戻されるように思う。

このところ、早朝には必ず朝日を拝むことができたのだが、今朝は違っていた。雨雲のようなものは見られなかったのだが、薄い雲が空全体を覆っている。気温も少しばかり低いことが体感的にわかったので、早朝に寝室の窓を開けることをしなかった。起床後、書斎に直行すると、そこには普段と変わらない書斎の風景が見えた。その空間は、絶えず私のことを待っているかのように見えた。椅子に腰掛け、窓越しに外の景色を眺めると、姿かたちの見えない小鳥たちのさえずりが聞こえる。

小鳥たちの鳴き声を聞きながら、私は自分の言葉をもってして、現象をどれだけ表現できるのかについて思いを巡らせていた。日記を綴る際に、自分の内側で言葉になることを待っている対象に対して、それをどれだけ細かなところまで自分の言葉で表現できるのだろうか。そして、細密に言葉を積み重ねていくためには、自分はどのような鍛錬をする必要があるのだろうか。そのようなことを考えていた。

---

日々、自分の言葉を紡ぎ出して何かを表現しようとするとき、それが自分の真意や感覚を完全に表現しきれないことにもどかしさを感じるがよくある。もちろん、冗長に言葉を積み重ねていくことは避けなければならないが、簡潔な言葉を積み重ねていく中で、細部にまで踏み込んでいくような表現技法を獲得することはなかなか難しい。こうしたことは何も日記に限らず、論文を執筆する際にも要求されることだと思う。論文の場合において、そうした緻密な言葉の積み重ねは、精密な論理の積み重ねとして現れるべきものだろう。

こうしたことを考えると、「表現の不可能性」という問題に突き当たる。日記にせよ、論文にせよ、自らが表現しようと思っていることを完全に表現し切ることは不可能なのだろうか。今この瞬間に聞こえてくる小鳥の鳴き声の音や質感を完全に言葉で表現することができないというまぎれもない事実が、言葉による表現の不可能性を自分に突きつけてくるかのようだ。今この瞬間に響き渡る小鳥の鳴き声の美しさを、自らの言葉で表現し切ることができたら、それはどれほど喜ばしいことだろうか。

そのような思いを抱えながら、しばらく静かに窓の外を眺めていると、言葉には表現の不可能性があるからこそ意味があるのだと思った。言葉による表現の不可能性に触れる形で言葉を紡ぎだそうするとき、言葉にならないものが言葉に乗り移るかのようには思える。言葉による表現の不可能性を真に自覚して言葉を紡ぎ出す時、言葉にならないものが言葉の中に宿るのである。それを大切にしていかなければならない。2017/6/17

### 1183. 病理と個性

連日連夜、学術論文を読み続ける日が続いている。ここしばらくは、専門書のような書籍に触れることはなく、愚直に無数の論文を読み進めることが続いている。そうした日々を過ごす中で、自分の内側から日本語が流れるように出てこない状況に直面している。自分の内側には、表現したいことが依然として山積みになっているのは確かだが、それらが滑らかな日本語として現れて来ることはなく、非常にたどたどしい日本語しか出てこない。

それを物語るように、ここ数日間の自分の日記には、言葉の流れのようなものをあまり感じられない。日記を書いている時にも、言葉を紡ぎ出すことを通じて、淀んだ流れをなんとかして澄んだものにしようとするのだが、そうした試みもうまくいかない。単純に問題の要因を、他言語の論文を読み続け

---

ることに還元することはできない。事実、私はこれまでも同じような日々を送ってきたはずであるから、それが問題の核心ではないだろう。

ひょっとすると、第二弾の書籍が世に送り出されたことと何らかの関係があるのかもしれないと思った。ただし、その何らかの関係を特定することは難しい。まとまった分量の自分の言葉が世の中に送り出されるという物理的な次元の現象は、今この瞬間の自分の言葉の流れをせき止める働きをしているように思える。言葉の閉塞感を覚えながらも、書き留めておくべきことだけを淡々と書き記しておきたいと思う。

昨夜の夢の印象が、起床後の今の自分の内側に留まっている。本来は、夢の中の全ての事柄に意味があり、それらは全て重要なことだと思うのだが、あえて全てを書き留めておくことをしない。昨夜の夢の中で最も印象に残っているのは、私の先輩が突然倒れ、救護室で先輩の容態を見守っている場面である。救護室のベッドで横たわる先輩を見ると、一向に目を覚ます気配がない。

その様子を見ている時の私の心境はとても静かだった。「心配」という感情が、その時の私の内側にあったと思いたい。だが、そう思わなければならないほどに、私の内側には何か別の感情があったように思える。あるいは、何ら感情が芽生えぬ境地の中で、その先輩の容態を見守っていたようにも思えた。

ベッドの横に立っていた私は、しばらくするとおもむろに自分のカバンから一冊の書籍を取り出し、それを読み始めた。自分の意識が完全に書籍の中の世界に入り込み、外側の世界はまるで存在していないかのようにだった。しばらくして突然、救護室に看護師が現れ、私に話しかけてくるまで、自分の意識は先輩に向かっておらず、書籍に向かっていて。おそらく、その看護師もそれを知ってだろうか、少しばかり呆れ顔を見せながら、「何の本を読んでいるのですか？」と質問をしてきた。

私は、その書籍の表紙を隠すように本を閉じ、本の内容について当たり障りのない短めの言葉で返答した。そこで夢から覚めた。

薄い雲がかかった空を眺めながら、夢の中の私が象徴しているように、どうして私はそれほどまでに活字世界の中で生きようとするのかについて考えていた。昨晚の夕食時に考えていた「精神病理と個性」の問題が、ここでも再度浮上してくるかのようだった。

---

---

私が危惧をしているのは、確かに世の中には病理的なものが存在していながらも、病理的なものの中に真に個性的なものが含まれるということだ。何もかも病理として片付けてしまうことは、真に個性的なものを殺してしまうことにつながりかねない。病理的なものの中に含まれる真に個性的なものを見極めるためには、あるいは、真に病理的なものと真に個性的なものの境界性を明確に引くためには、科学的かつ倫理的・道徳的な強固な枠組みがなければならない。2017/6/17

#### 1184. 根底変容

薄く覆われた雲の中、時折晴れ間が顔を覗かせるある土曜日。今朝は、「成人発達とキャリアディベロップメント」の論文を読むことに多くの時間を充てていた。月曜日の午後の最終試験を終えれば、いよいよ夏期休暇に入り、ここで私は、これまでの自分の探究姿勢と探究領域を根本から見つめ直すような大きな企てを実行したいと思う。

今朝も論文を読みながら、ふと思考が論文の内容ではなく、自分の内側に向かったとき、「一体私はいつになったら自分の仕事を始められるのだろうか？」という問いにぶつかっていた。欧州で生活を始めて以降、この問いの影を見なかった日は、ただの一日も存在しない。

毎日毎日、どこかの時間帯に必ずこの問いが私を襲い、自らの仕事とは何たるかを問いただされ、それを開始するまでの長い道のりを嫌というほどに突きつけられる。この問いとともに自らの内側に生じるのは、安直に既存の自己を受け入れようとする世間の風潮や、自己批判の精神を失った世間の風潮に基づく種々の誘惑的な発想やあり方である。そうしたものを一切排斥し、今自分が少しずつその輪郭を掴みつつある自らの仕事に向けて、一つ一つの歩みを意味と納得感を持って進めていかなければならない。

この夏の休暇は、自らの仕事を始めるための「準備のための準備」をするための重要な期間になるだろう。おぼろげながら見えてきている自らの仕事の開始時期、八年後からの仕事の開始に向けて、私はその準備のための準備をしなければならない。しかも、それは徹底的な準備でなければならない。

---

先ほど、私は改めて、自分の実年齢を思い出した。エリク・エリクソンやダニエル・レヴィンソンのライフサイクル理論は、まさに今の私の実年齢が当てはまる年代の人間が抱えるであろう発達課題を見事に描き出している。この発達課題を私は自分の芯から通り抜けていかなければならない。

今の私は、実年齢とは強い相関関係のない構造的発達心理学の枠組みにおける発達課題と、実年齢に対応した発達課題の双方を同時に抱えている。自分の両足に重たい鎖が絡みついているような感覚を持ちながら、それらの鎖を引きずりながらも、準備のための準備をこの夏の二ヶ月間にわたって行っていきたい。

生きる上での信仰心とある種の誓いのようなものは、今の私にとってなくてはならないものだ。この夏の徹底的な準備の先に、八年後から始まる自分の仕事があるのだと確信している。

一昨日、二作目の書籍が無事に世の中に送り出されたが、それは一通の手紙のようなものに過ぎない。確かに、その中に伝えたいことを込め、それを必要としてくれる人のところに届くというのは、それはそれで意味があるのだと信じたいが、今の私は自分が産み出したものを断固として認めることができない。

世の中に自分の文章を公表するというのは、自己の無知さを世の中に知らしめることであり、恥を晒すことに他ならないように思える。しかし、無知さと恥を晒しながら、そして自己の創造物を断固として否定しながらでなければ、今の私はもう一歩も前に進めないような気がするのだ。全く別の次元の全く異なる人間になろうとする幻想と私は日々格闘している。そうした幻想との格闘の中、やはりこの夏は、自己を根底から覆すような試みに着手しなければならない。2017/6/17

### 【追記】

「全く別の次元の全く異なる人間になろうとすること」が仮に幻想であったとしても、「全く別の次元の全く異なる人間になること」は全くもって幻想ではないことは明らかだ。一年前の自分はそれら両者の差異を見抜けていないようだ。真の発達、すなわち真の変容とは今の自分とは全く異なる人間になることに他ならないのだから。フローニンゲン:2018/6/26(火) 13:32



今日は、ドイツから来られた二人の日本人の方とフローニンゲンのレストランで昼食を共にした。フローニンゲンに来てから一年が経とうとしているが、知人の方がこの街に足を運んでくれることは初めてであった。

三人で昼食を摂りながら、様々な話題について意見交換をしていた。そこで話題に上がったことのどれもが、私にとって重要なものであり、これからの欧州生活を通じて、それが意味するものをより明確にしていかなければならないと思う。時間としては二時間半ほどだったが、欧州で暮らす日本人の方とこのように話ができたことは、私にとって様々な意味で有り難かった。その方たちと別れた後、私はまた一人になった。

自宅に向かう道中、独り言を口ずさみながら、考えなければならぬことを考えていた。自宅に到着し、すぐさま午前中の続きとして、論文を読むことを始めた。論文の文言をいくら大きな声で音読しても、それよりも大きな音を持つ自分の内側の声が絶えずこだましていた。なにやらそれは、第二弾の書籍の主題に関するものだった。

結局私は、日本の中で、真の日本人がいかに少ないかを強く嘆いていることがわかった。そうした嘆きをもたらす現象は、日本人の中で、いったい何人の人が、その瞬間瞬間に自分が日本語を話していることに自覚的であり、いったい何人の人が、自分の日本語を鍛錬することを毎日意識しているのか、という問題意識の中に如実に表れている。

人間としての器の成長にせよ、能力の成長にせよ、それが日本語空間において営まれるものであるならば、自らの精神が拠って立つ日本語を涵養しなければならない。ここではあえて、言葉と器や能力との関係性については議論しない。それはすでに、書籍の中に書かれているし、これまでの日記の中に書き綴ってきたことだからだ。

器や能力の鍛錬を日本語空間の中で営む際に、それらが立脚している日本語の鍛錬の必要性に無自覚なのはなぜだろうか。おそらく私の嘆きは、日本語の鍛錬の無自覚さにあるというよりも、母国語を蔑ろにすることは、日本人としての義務の放棄につながっているのではないか、という考え

---

方の中にあるだろう。母国語の鍛錬を放棄することは、自己への冒涇であり、日本の精神性に対する冒涇のように私には思えて仕方がない。

この思いは、欧州での生活の日々が積み重なっていくことに応じて、より強さを増している。こうした冒涇行為を行ってしまうというのは、やはり、言葉の持つ意味と力、特に母国語の持つ意味と力に無知だからだと思うのだ。

母国語は、私たち個人個人の内面の深くにまで染み渡り、個人個人の精神生活に多大な影響を与える。また、母国語は、私たちの精神文化の土壌であり、文化を根底から支えながらそれを育んでいくものである。しかし、そうした特性を持つ母国語への無頓着さと、それを保護し、さらにそれを涵養していくことの意志の希薄さに対して、私はなんとも言えない思いに駆られていた。

第二弾の書籍を執筆している最中に、私の内側にはそうした危機意識が絶えずあった。器や能力の鍛錬に躍起になる前に、私たちはもう一度、母国語が私たち個人と集合の精神に与える影響を捉え直さなければならないだろう。そうした試みなしに実現される器や能力の成長は、本質が骨抜きにされたものにすぎないだろう。2017/6/17

#### 1186. 慟哭

昨夜の就寝前に慟哭に襲われた。ただしそれは、悲しみの慟哭ではなく、嘆きの慟哭だった。時に私は、こうした慟哭に襲われることがしばしばある。

日本を離れ、米国で生活を始めてから、特にそれは定期的に現れるようになり、欧州で生活をする今も、同じような頻度でそれに襲われる。昨夜の慟哭をもたらしたのは、私たちが最後の一日を過ごす際に、果たして本当に「金銭の獲得」や「生産性の拡大」を叫びながら過ごすことができるのか、仮にできないのであれば、なぜ今それを叫ぼうとするのかに対する嘆きだった。

なぜ最後の日に主張できないことを、今この瞬間に盲信的に主張しようとするのか、それに対する憤りのようなものに私は包まれていた。これは、文化人類学者のアーネスト・ベッカーが指摘するような「死の拒絶」からもたらされているのだろうか。なぜ私たちは、自らの死の直前に主張できないこと

---

を、今この瞬間に主張しようとするのだろうか。なぜ私たちは、自らの最後の日と同じように、今日という日を過ごすことができないのだろうか。

最後の日における死の直前に、札束を握りしめて銀行口座の数字を気にする人間が一体何人いるのだろうか。最後の最後まで、貪欲に何かを消費しようとするような人間が一体何人いるのだろうか。生産性を強調する人間は、それでは果たして最後の最後まで生産性を追い求め、生産的に死のうとするのだろうか。もし仮に、そんなことはないと言うのであれば、なぜそれらを今求め、それらを今声高に主張しようとするのだろうか。

昨夜の私は、最後の日と今日の日における言行不一致の状況に憤りを感じていた。そしてもう一つ、嘆きを感じている対象があるようだった。それは一つ目の点とも関係している。それは、個人と社会の乖離に関する問題である。

その問題は、個人の内面的な問題を取り上げるとき、それがいかに社会的な問題と深く結びついているかに対する洞察、逆に社会的な問題を取り上げるとき、それがいかに個人の内面的な問題に結びついているかに対する洞察の欠如だと言っていい。社会の問題に対峙するとき、それは個人の内面的な問題と分ち難く結びついているという意識の希薄さや、個人の内面の問題に対峙するとき、それは社会の問題と分ち難く結びついているという意識の希薄さに対して、私は憤りを感じていた。

本来、社会の問題に向き合うというのは、個人の内面に向き合うことを強制し、個人の内面の問題に向き合うというのは、社会の問題に向き合うことを強制するはずなのだ。なぜそれらが乖離した形で取り扱われるのかに対して、私は強い嘆きの感情を持っていた。

なぜ私たちは、個人の問題を社会の問題として向き合うことができないのだろうか。なぜ私たちは、社会の問題を個人の問題として向き合うことができないのだろうか。そうした乖離そのものに対して、そして、乖離した状態で個人の問題や社会の問題を扱おうとする人たちに対して、やり場のない憤りを持っていた。

そのような感情を抱いたまま就寝し、先ほど目覚めた。起床してみると、自分の内側の世界が津波のようなものに襲われていた形跡を見た。大きなうねりが自分の内側の世界を通り抜け、それが去っ

---

---

て行ったのだという感覚が確かにあった。それは完全に立ち去り、外の世界も内の世界もとても静かだった。だが、それが通ったという生々しい痕跡があるのは紛れもない事実であり、津波のようなねりの感情が立ち去ったその後も、その痕跡は私の内側の世界に残り続けている。そして、その痕跡はおそらく、今後一生残り続けるだろう。2017/6/18

### 1187. 徹頭徹尾の一貫性

けたたましい慟哭が去ってからの朝は、奇妙なほどに静かだった。開放された書斎の窓から、小鳥のさえずりが聞こえ、書斎の窓から外の通りを眺めると、通りの上を一匹の灰色の猫が歩いていた。一切合切をまたここから進めていこうと思う。

昨夜の夢は、激しい慟哭によって破壊された内側の瓦礫を洗い流すかのような夢だった。夢の内容があまりにも光に満ちていたのは、就寝前の内面世界の状況の反動からだろう。ここでは夢の内容について書き留めることをしない。なぜなら、昨夜の夢も間違いなく、私にとって大切な意味を内包しながらも、それは就寝前の慟哭に対する慰めの報酬に過ぎず、夢の中の光を信じることができないからだ。

真実の光の前には、常に偽りの光が存在しているように思う。真実の光に行き着くまで、偽りの光に目をくれてはならない。そのような思いが湧いてくる。

昨日の午後にふと、慟哭の中で探究を続け、世界に関与しようとした人間たちについて考えている自分がいたことを思い出した。彼らは一様に、止むに止まれぬものによる探究活動を余儀なくされ、彼らの途轍もなく個人的な問題が社会の問題と強く合致している様子が見て取れた。「探究」というものは、本来このようなものでなければならぬのだと思う。先日の日記で、探究という言葉の持つ意味が変化し始めたことについて書き留めていたように思うが、あの時に書き綴っていたことの意味はまさにこれである。

個人的な問題と社会的な問題が、徹頭徹尾の一貫性を持ち、そこに一切の隙間もない状態。その状態の中で、止むに止まれぬものに突き動かされながら、絶え間ない思索と実践を遂行していくことが、探究活動の本質的な意味だと私は思う。

---

昨日の空を覆っていた灰色の薄い雲の大群が消え去り、雲ひとつない青空が広がっている。通りには道行く人も見えず、道路を通る車もない。そこにはただ、朝日に照らされた世界があるだけだった。葉の先端がかすかに揺れる緑の木々と小鳥の鳴き声。書齋の中を流れる音楽と私。

もう一度、今日からここから始めなければならない。瓦礫の世界から離れていくのではなく、瓦礫の世界の再建に向けて立ち上がらなければならない。日々が新たなものとして知覚されることと、日々が自らにとっての再出発として知覚されることを見るにつけ、人間の一生は、こうした出発の再帰性と同一のものなのだと強く思う。2017/6/18

### 1188.能力開発と能力測定の誤解

午前中の仕事に取り掛かる前に、最後にもう一つだけ書き留めておきたいことがあった。それは、第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』に記載した、「能力の高度化と実践力」の関係性についてである。私は本書の中で、能力の高度化に伴って実践力が高まるということの意味について説明し、その注意点を明記していた。

しかし、改めて振り返ってみると、もう少し言葉を付け加えなければ、少々誤解を生みかねないと思った。あるいは、既存の誤解が解けないままに、能力の高度化と実践力を結びつけてしまいかねないと危惧した。ここで、実践力というのは、知識と経験を具体的な状況における具体的な課題に対して適用する力だと捉えている。その意味を踏襲するのであれば、実践力という言葉は「パフォーマンス」という言葉に置き換えてもいいだろう。

しかし、最もありがちな誤解は、「意識の発達が高まればパフォーマンス」が向上するというものである。この誤解の原因はどこにあるのだろうか？

それは端的に、還元主義的な発想と心理統計に関する基礎的な知識の欠落に原因があるのではないだろうか。まず、還元主義的な発想というのは、本書で指摘したように、ロバート・キーガンやビル・トーマートをはじめとした発達理論で取り扱われている領域は、私たちの能力が持つ無数の領域のうちの一つに過ぎないにも関わらず、意識の発達を無数の能力領域と安易に関係付けてしまうことを指す。繰り返しになるが、意識の発達をもってして、個別具体的な能力のパフォーマンスが

---

向上するという実証研究は今のところ存在せず、意識の発達もまた一つの能力の発達に過ぎない  
ということを入念に入れておく必要がある。

確かに、意識の発達によって、その領域と密接に結びついた能力(例:自己認識能力など)は向上  
するのだが、それ以外の能力の向上と安易に結びつけてはならない。そして、この問題と密接に関  
係しているのが、心理統計に関する基礎的な知識の欠落である。特に、「妥当性(validity)」という  
概念の欠落が、意識の発達と個別具体的な能力を安易に結びつけてしまうことや、間違っただけで  
能力の高度化と実践力の高度化を結びつけてしまうことを引き起こしかねないと危惧している。

心理統計の文脈において、妥当性というのは、「測定手法が測定したいものとどれだけ合致してい  
るのか」という度合いを指す。ここでの話を元にそれを言い換えると、妥当性というのは、意識の発  
達と個別具体的な能力との合致度合いである。

意識の発達について取り上げる人の中で、この妥当性という概念が恐ろしく欠落しているように思  
えて仕方がない。意識の発達と実際のパフォーマンスとの関係を真に検証することなしに、安易に両  
者を結び付けようとする様子を頻繁に目撃する。また、これは意識の発達に限らず、個別具体的な  
能力を取り上げる際にも当てはまる。つまり、仮に「意思決定能力」という個別具体的な能力をトレー  
ニングの対象、もしくは測定対象に取り上げたのであれば、トレーニングの内容や測定の評価は、  
必ずその個別具体的な能力に紐付いていなければならない。

これは至極当たり前のことなのだが、実際にはこの結びつきが脆弱であることをよく目撃する。要す  
るに、パフォーマンスの評価をする際に、そもそも最初からそのパフォーマンスと紐付いていない能  
力を測定対象としていたり、トレーニングの実施において、真に開発を意図する能力と紐付かない  
ようなトレーニングを提供しているということだ。

厳密には、妥当性にも様々な種類があるのだが、能力開発の現場や能力測定の現場では、このよ  
うに、妥当性という概念に対する意識が非常に希薄であるように思える。とりわけ、発達理論をもと  
にした測定手法を開発する者やそれらを活用する者の中で、こうした傾向が見られることには注意  
が必要だ。実際には、複数存在する発達測定のうち、どの測定手法が何を測定し、それぞれの測

---

定手法の妥当性がいかほどなのかを把握しようとする人が意外なほどに少ない。そうした意識が実に希薄な現象が見られる。

実際のところ、発達測定の中では、ロバート・キーガンの「主体・客体インタビュー」、スザンヌ・クック＝グロイターが洗練させた、ジェーン・ロヴィンジャーの「自我発達測定(文章完成テスト)」、レクティカの「LAS」、マイケル・コモنزの「階層的複雑性測定」の手法は、妥当性に関する実証研究がなされ、それらは妥当性の確保されたものであることが示されている—妥当性の確保の前に、「信頼性」が確保されていることは言うまでもない。

一方で、スパイラルダイナミクスと呼ばれる意識の発達測定に関しては、妥当性に関する研究はなされておらず、すでに専門家の中では、この手法の妥当性と信頼性は極めて怪しいものだと見なされている。このように、発達測定には複数のものがあり、それぞれに妥当性が異なることに注意をしなければならない。また、どの測定手法が何を測定するものなのかということについても、明確な知識を持たなければならない。そうした知識がなければ、私たちは誤った形で発達測定を活用してしまうことになるだろう。2017/6/18

#### 1189. 『成人発達理論による能力の成長』: 高度な能力と具体的な行動との関係性

第二弾の書籍の発売日とフローニンゲン大学の最終試験の期間が重なり、心中穏やかではない。そのような日も、ようやく明日で終わる。明日からは実質上、夏期休暇に入り、ここから二ヶ月強の間、私はなすべきことをなそうと思う。それは、全く異なる場所に行くための必然的な準備である。この期間をどのように過ごすかの気概はすでに充満しており、具体的に何をなすべきかも明確である。明日の午後に最終試験が全て終わるその瞬間から、全ての新しいことが始まる。

書籍が出版されてから三日が経ち、早速何人かの知人の方から読了後の感想を教えていただいた。その中でも一つ、重要な質問事項をここで取り上げたいと思う。

その質問の趣旨を端的に述べると、カート・フィッシャーのレベル尺度において高度な段階に到達している人が実際に発揮する具体的な行動についてである。言い換えると、能力レベルと具体的な行動との関連性に関するものだ。例えば、「マネジメント能力」というものを例に取った場合、「マネジメント」という概念に対して、仮に原理レベル(レベル12)の力を持っていたとしても、具体的な行

---

動としてそれが現れるのかどうか、という問いにつながる。より具体的には、マネジメント論に関して高度な原理原則を構築している人が、他者への関わり方が自己中心的になってしまったり、他者への配慮を欠き、結果としてチームを巧くマネジメントすることができないケースもあるのではないかと、ということだ。

確かにこうしたケースは起こりうる。なぜなら、マネジメント能力を構成するサブ能力に関して、それらの構成要素のレベルがどういったものかによって、各要素で発揮される具体的な行動が左右されるからである。例えば、マネジメント能力を構成する「他者理解能力」や「関係性構築能力」が低い場合、それらは、他者理解や関係性構築の欠如といった具体的な行動において現れる。だが、忘れてはならないのは、原理原則レベルに到達するというのは、そもそもそれらの構成要素が高度なレベルに到達してなければならない、ということである。

さらに、本書の中で「位置エネルギー」の比喻を用いたように、各要素の能力は常に具体的な行動と結びついており、能力の高度化は、その具体的な行動が持つ実践力に他ならない。また、マネジメントに関して、真に原理原則レベルに到達している人というのは、その人の思考は行動に具現化され、言行一致の精神でマネジメントに当たれる人のことを指す。

より専門的な論点を述べるならば、フィッシャーの能力の高度化は、心理統計の観点から、具体的な行動との対応関係を担保しているのだ。これは、心理統計の古典的な問題であり、それは妥当性に関するものである。つまり、フィッシャーのレベル尺度を用いて「マネジメント能力」を測定しようとするのであれば、必ず具体的な状況と具体的な課題を設定することがまず行われる。ここでは要するに、測定しようとするマネジメント能力と現場でのマネジメント能力の合致度合いを確保するような試みがなされるのだ。

フィッシャーのレベル尺度を活用して実際のアセスメントを開発する際には、より複雑なプロセスを経なければならないが、端的には、測定しようとする能力と現場での具体的な能力の発揮のされ方の乖離度合いを何度も検証し、妥当性の高い測定手法を開発していくことになる。結果として、ある能力において原理原則レベルに到達している人は、実際にそれを現場で具体的な行動として発揮することが可能になる。原理原則レベルに到達している能力と具体的な行動の関連性が見られな



---

いことも多いのではないかという質問は、観察している具体的な行動が、そもそも別の能力を表すものであることを見逃している可能性から生まれているかもしれない。

要約すると、フィッシャーの能力尺度において高度な次元に到達するというのは、常に具体的な行動と密接に結びついており、具体的な状況における具体的な課題に対してその能力を高度に発揮できることを意味しているのだ。2017/6/18

### 1190. 刻印と刻成

それは黄色というよりも、黄金色と形容した方がふさわしい朝日だった。早朝目を覚ますと、まばゆいほどの朝日が寝室全体を包んでいた。目を開けた時の黄金の輝きと相まって、先ほどまで見ていた夢の内容が、なぜだかもう一度まばゆく鮮明に思い出されるかのようであった。夢の中で私は、懐かしい旧友たちと旧交を温めていた。

夢の中で何を話し、何をしていたかは、ここでは問題にならない。問題として取り上げるべきは、夢の核にあるものであり、今この瞬間の私を促す何かである。つまり、書き留めるための必然性を生むものだと言っていいだろう。欧州での生活を始めてから、旧友が登場する夢が多くなったような気がしている。

もしかすると、以前からそうした夢を見ていたのかもしれないが、その頻度が高まっているような気がするのだ。この現象は、私にとって一体どのようなことを意味するのだろうか。

日々、何かに向かって進んでいるような気がしながらも、何かに戻っていくような感覚が絶えずある。表現するのは難しいが、それは失われたものを取り戻すような感覚、いや、刻印されたものをもう一度自分の内から外へと顕現させるような感覚がするのである。この感覚を促すかのように、夢の中で昔の友人が登場し、過去の生活地などが想起されるのかもしれない。今朝はとりわけ、内側に流れている感覚が不思議なものに知覚された。

それはまるで、昨日までにないような感覚を獲得したかのような感覚、と表現できるかもしれない。この感覚は、今日から本当に何か新しいことが始まるかのような思いを引き起こす。

---

人生の進行は極めて緩やかであり、同時にそれは不可避に進んでいくようなものだとつくづく思われる。今の私はやはり、自分の中の奥深くにあるものに帰り、そこから何かを刻成していかねばならないのだと思う。起点は常に、自分の深層であり、表層ではない。また、起点を他者の深層に置いてはならず、自分の深層に置かなければならない。

自らの深層から、つまり、自分の中に刻印されたものから刻成していくことこそが、自らの生を歩んでいくことに他ならないのだと知る。同時にそれこそが、全ての表現の根幹になければならず、全ての実践はそこから始めなければならない。そこを起点としない表現も実践も、偽りのものだという気持ちがふつつつと湧き上がる。表現と実践の起点を自己の深層に置いて初めて、それらに社会性というものが備わるような気さえする。

表現や実践が社会的であるための最低条件は、それらが己に刻印されたものから生み出されたものかどうかにあるのではないだろうか。自分の深層に根ざしていない表現や実践が、真に社会的なものになるはずはない、という思いが起こる。そのような表現や実践には、決定的に重さと責任が欠けているのだ。自己を捉えてやまないものから全てを始めなければならない。

そこから表現と実践に従事していくことが、どれほど大事なことなのかに、ようやく気付かされた気持ちである。自己の奥深くに根ざされていない表現や実践は、自分の内側から排斥されなければならない。そのような思いを持ちながら、私は黄金色に輝く朝日を眺めていた。2017/6/19

### 1191. 発達の律動と発達の淵

何かに触れる形でそれを知ること。それは身体的な次元でなされるというよりも、精神的な次元でなされるようなものであり、それは精神的な何かを「触知する」と表現できるだろう。

昨日、私は何かに触れていたんだと思う。それはこれまでにないようなものであり、今日からの私を新たに導いていくようなものであった。正直なところ、それはまだ言葉の形になることを許さない。別の表現で言えば、それは、今の私の言葉の世界から滑り落ちてしまうようなものである。

ゆえに、私はあえてそれに今の自分の言葉を当てない。それは間違いなく、緩やかに深耕していく現在の自分の内面世界の深くにあるものであり、それこそが自分の次の内面世界を形作るものな

---

のだと思う。それは将来の自分の内面世界を形作るものであるがゆえに、今の段階の私の言葉を寄せ付けないというのは、とても納得のいくことだ。だが、昨日間違いなく私はそれに触れたのだという感覚が、一夜明けた今この瞬間にも残っている。

それは「発達」の淵」と表現できるようなものであり、私はそれを触知していたのだと思う。それは、現在の自己と将来の自己とを同時に知覚するような感覚を引き起こす。また、絶えず緩やかに深耕していく発達」の淵に触れるというのは、発達」の律動に触れることに他ならない。もしかすると、それは生の躍動と言換えることができるかもしれない。ただし、発達」の淵に触れるというのは、自分がまさに徐々に深耕していく何か」に他ならないという自覚的な感覚を引き起こす点において、生の躍動と表現されるものとはまた別種のものなのかもしれないと思う。

今、自分がこのようにして、欧州で生活と仕事を営んでいることが、時に信じられないことがある。今この瞬間も、自分がどこにいるのかわからないような感覚だ。しかしそれでも、私の内側には脈動する何かがあるのは確かであり、発達」の律動が私をこの地での生活と仕事に向かわせるのは確かだ。それは避けようのないものであり、必然的なものである。

私は何かをするためにここに来たわけではなく、自分の内側に脈動するものに押されてここに来たのだ。また、私が新しい一歩を毎日刻んでいこうとする意志の奥には、発達」の律動があるのは疑いようもないことである。発達」の淵に触れるという体験は、そうした感覚を引き起こす以外にも、自分の精神に火をつけたかのようなものである。その体験そのものは一瞬に過ぎないが、火をつけられた精神は永続的な運動を見せはじめた。

この精神を通じて、今日の夕方から始まる夏の休暇を過ごしたい。できることなら、発達」の律動を絶えず感じる中で日々の探究と実践に励み、自らを新たな発達」の淵に送り出したいと思う。自分にとってこの夏が存在する意味は、それを成し遂げるためだったのだろう。2017/6/19

#### 1192. ライデン訪問に向けて:「スピノザ記念館」と「国立古代博物館」

今年一年のプログラムを締めくくる最終試験への準備のため、連日連夜、自らの関心事項に純粋に則った探究と仕事を控えている。そうした日々が少しばかり続いたためか、疲労のようなものが蓄積していることに気づく。特に、昨日と今朝は、午前中にしばらく目をつむっておきたくなるような倦

---

怠感があった。先ほどは実際に、書斎の椅子ではなく、ソファに腰掛け、しばらく目をつむって安静にしていた。すると、ここ数日間、最終試験に向けて蓄積してきた知識が、断続的な映像を伴って動いている様子が知覚された。その映像の動きが落ち着きを見せるまで、無意識の世界にしばらく浸っていた。

数分ほど経ち、知識の消化運動が収束すると、私は目を開けて、再び書斎の机の前に座った。そして、論文の読み込みを再開させた。こうした日々も今日の午後で終わりを迎える。あと少しのところまで来た。

午後に控えた最終試験が終われば、夕方からは止むに止まれない形で、自らが選択した論文と専門書を読み進めたい。ただし、明日だけは、休息というわけではないかもしれないが、オランダの他の都市に日帰り旅行をしたいと思う。日帰り旅行と言っても、デン・ハーグの北に位置する「スピノザ記念館」ただ一つの場所に足を運ぶだけだが。

調べてみると、フローニンゲンから二時間ほどかけて、オランダの主要都市の一つであるライデンに行き、そこからバスに10分ほど乗ればスピノザ記念館に着く。しかし、ライデン駅からスピノザ記念館まで歩いてわずか一時間ほどであったため、当日は歩いて目的地に向かうことにしたい。地図を眺めていると、ふと「国立古代博物館」が目にとまった。スピノザ記念館だけを訪れようとしていた私にとって、これは思わぬ発見であり、国立古代博物館の展示物に強く惹かれるものがあった。

というのも、私は昨日、八月のノルウェーへの旅行の前に、やはりギリシャかエジプトに足を運ぼうかと思っていたところだったからだ。調べると、国立古代博物館には、古代エジプトや古代ギリシャの彫像などが数多く展示されているようであり、実際に当地を訪れる前に、この博物館にまずは足を運んでおく必要があるように思われた。確かに、ライデンには、レンブラントを代表とする、オランダの名匠たちが残した傑作が所蔵されている美術館がある。しかし、今の私はそうしたものを見ることを求めているようなのだ。

絵画の鑑賞は、確かに私にとって重要なことなのだが、今この瞬間の私の心を動かすものはそうしたものではない。古代エジプトや古代ギリシャの彫像、あるいはノルウェーの持つ大自然が、私を強く惹きつけ、また自分の根底を突き動かす。明日は、10時の開館に合わせて国立古代博物館に到

---

着するようにし、午後からスピノザ記念館に向かいたい。明日の今頃、私はライデンにいるだろう。

2017/6/19

### 1193.「測定主義」の危険性

先ほど、一年目のプログラムの最終試験を全て終えた。今日は、太陽が燦々と降り注ぐ夏日であり、試験会場に行く最中の道のりはとても暑く感じた。

今日の試験は、「成人発達とキャリアディベロップメント」に関するものであり、一年目のプログラムを締め括る最後の試験だった。この一年間で受講してきたコースの最終試験は全て、コンピューター上で解答するものか手書きで解答するものだった。中には、期末の論文を課すコースもあった。今回のコースは、論文だけではなく、選択式試験も加味して最終成績を評価することになっていた。

私自身、フローニンゲン大学で初めて選択式試験を受けることになったため、出題形式や出題難易度などに未知の部分が多々あったが、比較的満足のいく出来であったように思う。試験会場を後にした私は、広大なキャンパスと同じように、開放的かつ解放的な心になった。

ようやく一年目のプログラムが全て終わったことに対して、大きな安堵感を得たようだった。この一年間で得た学びというのは、知識面のみならず、むしろ知識以上により重要なことを数多く学んだように思う。それについては、また改めて書き留めておきたい。とりあえず今は、この解放感を持ったまま、これから始まる夏の休暇における探究活動に入っていきたい。

眩しいぐらいに輝く太陽のもと、私はキャンパスから自宅に戻る最中に、発達測定について改めて考えていた。本書『成人発達理論による能力の成長』で紹介した、カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論を活用した測定手法は、領域固有型ではなく、領域全般型という特徴を持つがゆえに、理論上は全ての能力について測定をすることができる。

また、「測定」の重要性について本書の中で指摘したように、能力の成長を育んでいくためには、適切な測定手法と適切な課題と支援が必要になる。しかし、ここで誤解して欲しくないのは、日本では能力の発達度合いを正確に測定する手法がまだ存在していないがゆえに、フィッシャーの測定手法は非常に価値があるが、過度な「測定主義」に陥らないようにするという発想も等しく私たちに求

---

められる。いくらフィッシャーの理論を活用した測定手法が領域全般型の特徴を持っているとしても、この世界には測定する必要のない能力があることを忘れてはならない。それらは、実務的な理由から測定する必要のないものかもしれないし、倫理的・道徳的な観点から測定してはならないものかもしれない。いずれにせよ、私たちのあらゆる能力を測定しようとするような極端な態度に陥らないようにしなければならない。

構造的発達心理学の枠組みによる発達測定手法は、間違いなく質的な差異を測定しているのだが、その結果は「レベル」や「段階」という形で数値化される。仮に、私たちのありとあらゆる能力の質的差異が測定され、それが数値化されるような事態は、地獄絵図ではないだろうか。そのような世界を想像すると、「支援」や「育成」という言葉が消え去り、「管理」と「培養」という言葉がはびこってしまうのではないだろうかとゾッとしてしまう。

私たちは、能力の質的な差異を見極められるようになるだけではなく、真に測定すべき能力が一体何であるのかという見極めも合わせて行っていかなければならないだろう。2017/6/19

#### 1194.『成人発達理論による能力の成長』:能力という生態系の危機

本日の夕方から、二ヶ月半ほどの夏期休暇に入った。最終試験終了後、自宅に戻ってから早速、この休暇を利用して読もうと思っていた論文群に手をつけ始めた。今から数日間ほどは、まずMOOCに関する論文、インナ・セメツキーの教育哲学に関する論文、ダイナミックシステム理論に関する論文を読む予定である。そこからは、七月に一括購入する予定の専門書が届くまでの期間において、書斎の本棚にある専門書と哲学書をとにかく順番に読み解いていく計画を立てている。

この夏の集中的な読書は、秋以降、特に冬の時期における私を大きく支えるものになるだろう。さらには、この夏の集中的な読書は、今後長きにわたって私の探究の重要な土台になってくれるだろう、という予感がしている。

最終試験から自宅に戻り、コーヒーを入れて一息つこうとしたところ、能力の成長に関する「バランス」について新たな問題意識が芽生えた。もしかすると、拙書『成人発達理論による能力の成長』を読むことによって、自分の中で現在能力がそれほど高くないものを高め、能力全体のバランスを取ることが望ましいという発想を持ちかねないことを危惧した。

---

---

私たちは、ここで用いられている「バランス」という言葉を吟味しなければならない。なぜなら、一般的に用いられる「バランス」という言葉は、「均衡(equilibrium)」と「均質(homogeneity)」の二つの異なる意味のうち、後者のことを指していることが多いからである。

結論から述べると、能力の成長において重要なバランスというのは、前者であり、決して後者の意味ではない。能力の成長において、「均衡」というのは何を指しているかという点、多様な能力が当人の中に存在し、それらの能力のレベルも多様性が確保され、そうした多様性が一つの安定的な状態を作っていることを指す。

まさにこれは、調和の取れた生態系のイメージである。一方、「均質」というのは、能力の種類とそれらのレベルにおける多様性が確保されていない状態のことを指す。生態系の例で言えば、その生態系内に強弱に富んだ生物種の多様性が乏しいイメージである。仮に、私たちの能力が後者のような状況に置かれてしまうと、それは能力全体の生態系が一気に崩壊しかねない危険性を持つ。その様子は、生態系内に強い力を持った動物だけを生息させようとした場合に、その生態系が必ず破壊してしまうのと同じである。これは、人間の成長のみならず、組織の成長においても等しく当てはまることである。

私たちに求められるのは、能力の多様性を確保することであり、それらの能力レベルが異なっていればいるほどに、能力全体の生態系は健全な姿で営みを継続させていくことができる。仮に、ある能力のレベルが低いからといって、それを強引に引き上げようとするような働きかけをすると、生態系全体を破壊してしまう危険性を念頭に入れておかなければならない。

認識論者かつ発達心理学者のジャン・ピアジェは、「均衡」という言葉を用いて、段階の移行過程を説明している。その文脈における均衡と、今ここで紹介した意味は完全に一致していないが、ピアジェも生態系のイメージを用いて能力の成長について考えていた点では同じである。ここに、ピアジェが複雑性科学の発想に基づいて人間の成長を捉えていたことがわかる。そこからさらに、なぜ多くの人たちは、能力の成長を均質化させようとする発想を持つのかについて考えていた。

一つにはもちろん、人間の能力の成長を複雑性科学の観点、特に生態系のメタファーを用いて捉えようとする観点がないからだろう。これはある意味、複雑性科学の知識の有無に関するものである

---

ため、ひとたびそうした知識を獲得することができれば、能力の成長を均質化させようとする発想から抜け出ることができだろう。しかし、ことはそれほど容易ではないことに気づく。おそらく、複雑性科学の知識を得たところで、多くの人は相も変わらず、自分の能力の中で弱い生物種の力を向上させることに躍起になるだろうと思われる。あるいは、強い生物種の力をさらに引き上げることばかりを考えることになるだろうと思われる。

そもそも冷静になって考えみると、私たちの能力全体という生態系は、捕食者と被食者の関係性が至る所に見られる。つまり、ある能力が向上すれば、他の能力が停滞することは十分に考えられ、一つの能力に特化して鍛錬を続ければ続けるほど、他のある能力が劣化していくことは十分に考えられるのだ。さらにそもそも、なぜこのような現象が見られるかという、私たちの資源は有限だからだ。私たちが能力の成長にかけることのできる時間や身体的・精神的なエネルギーなどは、そもそも有限な資源なのだ。

ここに私は、現代社会を覆う盲点である「資源の有限性」に関する問題が関わっている気がしてならない。現代社会の中にいる私たちは、資源を無限のものだと錯覚しがちである。そうした錯覚を生む一つの大きな要因は、既存の経済原理にあるだろう。既存の経済原理における発想は、どうしても資源というものを無限なものだと錯覚しがちであり、無限成長を求める傾向にある。こうした社会的な発想が、やはり私たち個人の発想を呪縛しているように思えるのだ。そして、そうした呪縛は、能力の成長を考える際にも色濃く現れている。これは非常に危惧すべき事態だと私は思う。

私たちは間違いなく、有限な存在であり、能力の成長に費やすことのできる資源も無限ではないのだということを強く自覚しなければならない。こうした自覚がなければ、私たちは、自らの能力全体の生態系を破壊してしまう悲劇に見舞われてしまうだろう。

現代社会において、私たちに求められているのは、能力の成長を推進していくというよりも、まずは自らの資源の有限性に気づき、無限成長を追いかけようとする既存の発想からいち早く抜け出ることにあるように思うのだ。2017/6/19



---

## 1195. 夏季休暇の始まり

今日は夏季休暇の一日目である。本格的に二年目のプログラムが始まるのは、九月の二週目ぐらいであるから、およそ二ヶ月半を越す休暇となる。この期間は、自分にとって大きな転換期になるだろう。そんな風に思う。この期間の過ごし方は、探究者として、実務家として、いや、究極的には一人の人間として、今後どのように生きていくのかを決定づけるような気さえする。

今朝は五時に起床し、六時半あたりに自宅を出発し、ライデンへ向かう。それは、古代エジプトと古代ギリシャの彫刻を見に、「国立古代博物館」へ行くためである。また、哲学者スピノザの過ごした場所を見るために、「スピノザ記念館」に行くためである。これら二つの場所を訪れるのは非常に楽しみでありながらも、今の心境はとても静かだ。早朝ということも手伝っているのかもしれないが、初夏の季節に自分が溶け込んでいるかのような季節との一体感、取り巻く自然との一体感がある。

書斎から窓の外を眺めてみると、今朝は無風だ。一切の風がなく、家の周りに植えられた木々の小さな葉すら揺れていない。動いているのは空を舞う鳥たちだけであり、後の世界は微動だにしない。こうした静の優位な世界の中にあることも、今の私の心を鎮めてくれることにつながっているのかもしれない。

昨日は、外に出ると暑さを感じる一日だった。一方、今日はまた涼しい気温になっている。天気予報を確認すると、オランダ南部に位置するライデンの今日の気温は、昨日のフローニンゲンを少し上回るらしい。当地では少し暑さを感じるかもしれないが、天気にも恵まれているため、ライデンの街を観光するにはうってつけの日である。

今朝は五時に起床する前に、激しい夢を見て、3:33に一度目が覚めた。夢の主題は、自らの攻撃性の発露であった。夏の休暇の始まりを激しく後押しするかのよう、極めて強烈な印象を残す夢であった。夢の中の身体動作を引きずる形で、私は目覚める瞬間にも、夢の中と同じ攻撃的な動作を覚醒世界の中でも発揮していた。

激しい攻撃的な夢を見るときには決まって、夢の中の身体と覚醒世界の身体が強く連動し、どちらの世界においても暴力的な振る舞いを見せる。今朝の夢もそうだった。この夢に含まれていた攻撃性とは対称をなすように、起床直後の私の心的エネルギーはとても静かなものだった。極めて力強

---

---

い攻撃的な夢を見た後には、いつもこのような、何とも言えないような静かな感覚が自分の内側に現れる。

結局、攻撃的な夢を見る私の根本的な問題は何も解決はしていないが、この問題は、外側からの人為的な働きかけによって解決されるべきものではそもそもないのかもしれない。なぜだか、自分の活動を支える根源的なエネルギーがそこから生まれているような気がしているのだ。間違っても、これは治癒されるような対象ではない。治癒ではなく、新たな自分に包摂される形で変容される類のものなのだと思う。

今日という一日は、古代エジプト、古代ギリシャ、スピノザと深く触れることになると思うが、それらの中にこの問題に対する新たな啓示があるような気がしてならない。2017/6/20

### 1196. ライデン訪問記

今日は丸一日を使って、オランダ南部にあるライデンという街を観光した。ライデンの街がこれほどまでに自分に重大な意味をもたらすとは、全く想像していなかった。

三日ほど前に、今年一年間のプログラムに区切りをつけるために、何気なく訪れようと思った街だったにもかかわらず、この夏の過ごし方を一変させてくれるかのような感覚を私にもたらしてくれた。早朝の六時半に自宅を出発し、フローニンゲン駅へ向かう最中、私は昨年の夏の欧州小旅行の朝を思い出した。

昨年の夏に、ドイツ、スイス、フランスへ訪れたあの時の出発の朝が、今朝の姿と重なっていた。昨年の夏の欧州小旅行の出発時の朝を思い出す時、私は、昨年の冬に訪れたデン・ハーグに向けて出発した朝も同時に思い出した。記憶の連鎖反応に従うままに、私はフローニンゲン駅へ向かって歩いている最中、絶えずそれらの記憶について思い出していた。オランダ国内の旅行にせよ、オランダ国外の旅行にせよ、旅立ちの朝は何か格別な感情と感覚を引き起こす。

今朝の私は、とにかく古代エジプトと古代ギリシャの歴史に触れることへの期待感と、スピノザが思索活動に打ち込んだ住居へ訪問することへの期待感が強くあった。そうした期待感を胸に、私はフローニンゲン駅から列車に乗り込み、二時間半ほどかけてライデン駅に到着した。ライデンに到着

---

してすぐに気づいたが、フローニンゲンとまた異なる雰囲気が漂っていた。両者の都市は、文化的かつ歴史的に異なるものを堆積してきたことを物語っていた。

二つの都市が堆積してきたものが異なることは明白であり、両者が私にもたらす感覚も歴然と異なるものであることが知覚されたのだが、それらの差異を説明できるほどの語彙を私は持ち合わせていない。ただ一つだけ言えることは、ライデンの街はフローニンゲンの街と同じように、長大な時間にさらされる中で豊かな文化を育んできたということだ。

それは新興都市とは全く異なるものであり、時間と文化の堆積による密度がまるで異なるのだ。どちらの都市にも、重厚感があるという点においては共通だった。

正直なところ、今日は歩きに歩いた日々であったため、本日訪れた「国立古代博物館」と「スピノザ記念館」については、明日改めてゆっくりと振り返りを行いたいと思う。明日のための備忘録として少しばかり書き留めておくと、国立古代博物館にある古代エジプトの展示物がこれほどまでに私を強く惹きつけ、多大な影響を与えるとは思ってもみなかった。紀元前3000年、今からおよそ5000年ほど前に、人類がこのような文明を築き上げたことに対して、純粋な驚きと感動を持った。

そこで展示されている当時の人間たちが産み出した数々の作品を眺めていると、「人間とは創作することを宿命づけられた生き物である」という言葉が、落雷のように私に直撃した。結局、古代エジプトの所蔵品を見るだけで昼食時間になった。ここでの体験があまりに強烈なものであったためか、古代ギリシャやその他の所蔵品については、何かの促しに見舞われることは一切なかった。やはり、古代エジプトの文明から私が得た感覚は、今の自分にとって極めて大きな意味を持つため、明日の早朝にこの点については改めて書き留めておかなければならない。2017/6/20

### 【追記】

発達心理学者のロバート・キーガンは、「人間は意味を作ることを宿命づけられた生き物である」と述べているが、ここ最近私は、人間は意味を作るよりも先に創造を宿命づけられた生き物なのだと思うようになっていく。上記の日記で指摘しているように、人間を規定する最重要な要件は創作することなのだ。これはライデンの古代博物館を訪れた時だけではなく、数日前に訪れた大英博物館においても感じたことである。

---

また、大英博物館の所蔵作品の中で、どういうわけかやはり古代ギリシャの所蔵品にはあまり感じるものはなく、古代エジプトの所蔵品に強く惹きつけられるものがあったことは興味深い。両文明の違い、そしてそれが私に喚起するものの違いについて理解を深めていく必要があるだろう。。フローニンゲン:2018/6/26(火)14:48

### 1197. ライデン訪問から一夜が明けて

昨日のライデンの訪問から一夜が明けたが、まだその余韻が残り続けている。昨日は、新たな点において感化されるような日であった。

起床直後、昨日についての回想を始めようとしたところ、それよりも先に、昨夜の夢について思い返すことを強いられていた。夢の中で私は、一人の老賢人と対話をする機会を得ていた。その方は、80歳の日本人の方であり、日本で生まれた後、三歳の時に台湾にわたり、それ以降、36歳までその地で生活していたそうだ。知人がかつてその老人のもとを訪れ、話を伺った時にとっても感銘を受けたという話を聞いた。

その老人の知識の豊富さというよりもむしろ、一つの知識をいかに深く習得するかに関して、常人の想像を遥かに超えているということを知人から聞いていた。その老人は知識の獲得の際に、自らの身体を通じて知識項目と接し、知識を深める際にも、それを自分の身体を通過させることによって知識が血肉化していくというプロセスを、私たちの想像もつかない次元で行っているらしい。

私はその知人に、その老賢人との面会の約束を取り付けてもらい、老人が住んでいる家に向かった。その家は、小高い山に続く道の中腹にあり、その外見はあまり立派なものには見えなかった。偶然にも、私の到着に合わせてその老人が家から顔を出し、お互いに簡単な挨拶をしたところで、家の中に招き入れてもらった。すると、家の外見とは対照的に、家の内装はモダンな感じであった。

全てのものが小綺麗に整理されており、リビングと書斎を兼ねた部屋はとても開放的だった。その老人と少しばかり会話をしてからだっただろうか、老人はリビングからロフトのような二階に、一風変わった階段を使って上がっていった。なにやら、ロフトに大きな本棚がいくつかあり、その中から面白い本を持っていくといい、とその老人はロフトの上から私に言った。布のようなものでできた足場の不安的な階段を、ゆっくりゆっくりと登っていくと、徐々に本棚の姿が見えてきた。

---

ようやくロフトに到着した時、そこには地面がなく、大きな布団が浮かんでいた。その布団が地面の代わりになっており、先ほどの階段と同様に、足場が非常に不安定であった。布団に一歩足を踏み入れた時、布団の真ん中に黒い猫が寝ているのが見えた。その猫は老人が飼っているものらしかった。

私とその猫にゆっくりと近づいていくと、猫は目を覚まし、私の方をちらりと見てから、ゆっくりと階段の方に向かい、そこから勢い良く階段を降りていった。猫が一階に到着するまでの時間は一瞬だったが、私はそれを見届けてから老人の方へ向いた。見ると、四つほどの大きな本棚があり、よくよく見ると、そこに所蔵されているのは日本の漫画だった。知人から話を聞いていたが、この老人は学術書のみならず、漫画もこよなく愛しているとのことだった。

本棚に所蔵されている漫画の背表紙を眺めてみると、私もよく知っているものばかりだった。老人が本棚の漫画について説明を始め、私はあれこれ質問をしながら老人の話に耳を傾けていた。それは非常にたわいの無いやり取りであり、特に難解なテーマについて話をしていたわけではなかった。対話が収束に向かうと、私たちはロフトを後にして、一階に降りることにした。

一階に降りる最中に、その老人の生活リズムに関する話になった。なにやら、毎日夜の十時からCNNを30分ほど視聴し、少しくつろいでから就寝するとのことであった。80歳という年齢にもかかわらず、私よりも随分と遅い時間帯まで起きていることに少々驚いた。一階に降りてくると、私は老人の家をお邪魔することにした。

老人は親切にも家の外まで見送りに来てくれた。結局、終始たわいの無い話しかしていなかったのだが、その老人が非常に鋭い知性を持っていることだけはわかった。家の外まで見送りに出てきてくれた老人に私は頭を下げ、山道を下って行った。その最中、「知識というのは自らの内側を通して接しなければならぬ」とつぶやいた老人の一言を思い出していた。

終始たわいの無い話しかしていなかったはずだが、その言葉はまさにあの老人のものであった。老人が残したその言葉の意味を少しずつ噛み締めるかのように、私はゆっくりゆっくりと来た道を歩いていた。2017/6/21

間違いなく自分に何かが起こり、その何かが少しずつ自分の奥深くに浸透していく運動が始まったかのような感覚に今包まれている。それを引き起こしたのは、昨日のライデン訪問だった。

昨日の早朝に自宅を出発し、フローニンゲン駅に到着した私は、早朝の肌寒さもあり、駅構内のコーヒー屋でホットコーヒーを注文した。注文したコーヒーが届き、店内のテーブルに腰掛け、何口か飲んだところで、出発時刻までもう少し時間があつたが、プラットホームに向かうことにした。

乗車予定の列車は、すでにプラットホームに到着して出発を待っていた。列車に乗り込むと、私はすぐに、持参した“Authority, Responsibility, and Education (1959)”をカバンから取り出した。この書籍は、フローニンゲン大学の社会学棟にある、書籍の寄付所で偶然見つけたものであり、特に権威が教育にもたらす肯定的・否定的な影響について関心があつた私にとって、この書籍は非常に参考になる一冊である。

ライデンまでの二時間半ほどの間、私はこの書籍を食い入るように読み進めていた。権威が教育に与える影響とは直接関係ないのだが、著者は、全ての心理的な現象を無意識の問題として説明しようとするフロイトの考え方に否定的な見解を述べている箇所が印象に残っている。その見解の中で、一つ面白い話があつた。

「ピタゴラスの定理」で知られる古代ギリシャの数学者ピタゴラスが、ある日、砂の上に三角形を描いているところからその話は始まる。そんなピタゴラスのもとに友人がやってきて、ピタゴラスの横に腰掛けてから二人の会話が始まる。

**ピタゴラス:**「なぜこんな三角形ばかりを描いているのか自分でもわからないんだ。これらの三角形は、どこか自分を不安にさせるものや魅了するようなものがあるのは確かなんだが。」

**ピタゴラスの友人:**「そうか、それでは奥さんとの関係はどうなんだい？」

---

友人がそのような質問をピタゴラスに鋭く投げかけた時、ピタゴラスは少しばかり下を向き、「ああ！」とつぶやいた。ある気づきを得たピタゴラスは、それ以降、三角形を描くことはなくなり、ピタゴラスの定理を残すことはなかった、というオチの話である。

この話を読んだ時、現実世界に表出している具体的な行動を無意識の世界と不用意に結びつけて説明することの危険性を感じた。これまでの日記で書き留めていたように、私たちの無意識の世界には、創造的な活動に従事するための根源的なエネルギーが存在しており、そこに下手に手を加えることは、創造性を枯渇させてしまうことになりかねない。つまり、「治癒」という名の下に、無意識の世界に手を触れることには危険性が内包されているのだ。この話は権威の話と直接的に結びつかないと述べたが、そうでもないように思えてきた。

著者は、本書の中で、教育は決して精神療法ではないということを強調していた。この指摘は、非常に重要なもののように思える。仮に、教師の発言や行動が全て精神療法に裏打ちされたものであった場合、それは子供たちの精神を治癒するという名目の下、彼らの創造性を奪いかねない。また、教師という権威的な人物がそうした精神療法的な働きかけをした場合、その効果はより強力であるがゆえに、子供たちの無意識に与える影響も強くなり、それが治癒的なものをもたらすことがあったとしても、逆に、子供たちの創造性を枯渇させかねないことにも注意が必要だろう。

そのようなことを考えながら、列車の窓から外を眺めていると、朝日に照らされた田園風景が目に飛び込んできた。ひどくのどかな風景の中、巨大な風車が無数に連なっている姿が見えた。人格のない巨大な風車がゆっくりと動いている様は、少しばかり不気味に映った。2017/6/21

#### 1199. ライデン訪問記:長大な時間をかけて積み上げられたもの

ライデンに向かう列車の中、私は持参した書籍をずっと読んでいた。時折顔を上げ、窓の外に広がる景色を眺めるのは、心地よい息抜きとなった。持参していた“Authority, Responsibility, and Education (1959)”という書籍を読む中で、改めて、教育哲学に大きな貢献を果たしたジョン・デューイ、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド、フリードリヒ・フローベルの仕事を参照する必要があると思わされた。

---

フローベルに関しては、彼が発達に関する優れた洞察を持って教育を捉えていたことがわかった。具体的には、フローベルは、子供たちには様々な発達段階があり、そうした発達段階を的確に掴むことの重要性を強調し、子供たち各人が持つ関心事項と発達段階を考慮した教育を施す重要性を指摘していたことを知った。それに気づいた時、自宅の書斎の本棚の中に、フローベルの“Friedrich Froebel: A Selection From His Writings (1967)”があることを思い出した。列車の中で私は、その書籍をこの夏にぜひ読みたいと思った。

早朝の列車は非常に空いており、隣の席には誰も座っておらず、気兼ねなく書籍に没頭することができた。デューイとホワイトヘッドに関しては、私がこのところずっと関心を示していた、「躍動する知識」に関してヒントを得たように思った。特に、ホワイトヘッドは、自らの関心に合致しないような知識を無理に学ぶことは害悪であり、それを通じて仮に何らかの知識が得られたとしても、それは「不活性化知識」だと見なしている。つまり、自らの関心に引きつけて獲得されなかった知識は、生命力を持っておらず、実践的に活用することができないのだ。

知識を体系化し、それを実践の場で活用できるようにするためには、自らの関心に引きつけ、自分の深層部分と連結させるようなことを意識しなければならない。そのような形で獲得されなかった知識は、本当に無用の長物であると最近強く感じている。

この夏は再度、フローベル、デューイ、ホワイトヘッドの教育哲学に触れることにしたい。そのようなことを思いながら読書に耽っていると、列車がライデン中央駅に到着した。ライデン駅からまずは、「国立古代博物館」に向かった。ライデンの街には、その他にも数多くの博物館や美術館がある。その中から、私はこの博物館だけを選んだ。

それは直感的なものであり、今の私は、古代エジプトや古代ギリシアの文明に触れておく必要がある、という促しにも似た閃きだった。駅から博物館に向かう最中、私はこの街を訪れたのが今回初めてだったためか、この街の風景一つ一つがとても新鮮だった。ライデンは、画家のレンブラントが生まれた街としても知られており、アルバート・アインシュタインがキャリアの初期に在籍していた、オランダ最古のライデン大学がある。そうしたこともあり、ライデンの街に足を踏み入れると、芸術的にも学術的にも豊かなものが蓄積されている街だということがすぐにわかった。



---

このところ、欧州の歴史ある街を訪れる際に、そこに蓄積されているものが発する重厚感のようなものを敏感に感じ取る自分があることに気づく。蓄積されたものに対する感性が開かれつつあるように思うのだ。長大な時間をかけてその街に築き上げられていったものは、それがいかに目には見えなくとも、とても重厚かつ濃密な何かがそこにあるということを私に語りかけてくる。ライデンの街にはそれがあったということを書き留めておきたい。

ライデン駅から10分ほど歩くと、目的の博物館が見えてきた。開館は午前10時からであり、開館時間ちょうどに到着することができた。この博物館は、古代エジプトと古代ギリシャの彫像や骨董品などを中心に所蔵しており、古代ローマの資料も豊富に展示されている。ここで私は、大きな啓示を得る体験をすることになった。2017/6/21

### 1200. ライデン訪問記:「国立古代博物館」を訪れて

国立古代博物館に到着した私は、受付を済ませ、荷物をロッカーに置いてから、三階建てのこの博物館の鑑賞を始めた。地上階では、特別展示と古代エジプトの所蔵品を閲覧することができる。

私は、特別展示へと続く入り口に置かれていた古代エジプトの彫像にすぐさま捕まった。それは、博物館の訪問者を歓迎しているようでありながらも、今を生きる人間を寄せ付けぬ威圧感のようなものを放っていた。この巨大な石で作られた彫像は、人間の姿を成しており、頭部から察するに、それは女性を表しているのだと思う。その胴体に刻まれたヒエログリフに私は思わず息を飲んだ。

それらはあまりにも細密かつ精密であったからだ。そこに刻まれた象形文字がどのような意味をなすのか、非常に気になっていた。古代エジプト人は、どのような意味を込めて、この彫像にこれらの象形文字を刻み込んだのだろうか、ということを絶えず考えていた。今からおよそ5000年前の紀元前3000年に、このような彫像技術と文字を持った文明があることに、私は驚きを隠せなかった。

博物館に入館したはいいものの、この彫像を見物するのに随分と長い時間をかけ、大きな驚きと感動をしばらく感じた後に、私はまず特別展示室に向かった。この特別展示室には、様々な地域の古代文明が残した、石の宝飾品が展示されていた。入り口で目撃した古代エジプトの彫像と同じように、そこで展示されている一つ一つの宝飾品の技術の高さには、大きな感銘を受けた。それらは、

---

私の想像を遥かに凌ぐほどの技術的精密さを体現しており、当時の時代において、このようなものを生み出したことをすぐに信じるできないほどであった。

特に一つ印象に残っているのは、名の知れぬ一人の人間が長大な時間をかけて、延々と一連の宝飾品を作り上げていったことがわかる作品だった。「これら一連の作品を残すためには、毎日それらの制作に向き合ったとしても、数年、いや数十年の時間を要するに違いない」という言葉が自然と漏れた。私は、そこで展示されている一つ一つの宝飾品をゆっくりと見て回った。その次に訪れたのは、古代エジプトの品々が展示されている場所だ。

「この博物館に来た目的は、それらを見るためだったのだ」ということが強く自覚されるような体験をした。そこで展示されていた、古代エジプトの棺とミイラが特に私の関心を引き、それらの制作技術に打たれるものがあり、彼らの死生観に対して触発される何かがあった。

古代エジプト人が持っていた死生観は、非現実的と思われるものもあるだろうが、それでも私は、大きな共感を持っていたのは確かであった。というよりもむしろ、彼らの死生観から私は何かを学ばなければならぬ、という強い思いが湧き上がっていた。

一つの巨大な棺を目にした時、その棺に刻まれたおびただしいほどの象形文字に圧倒されるものがあり、この棺を作るのにどれほどの時間を要したのだろうか、と思わずにはいられなかった。この棺の制作者は、きっと強烈な死生観を持っており、それを原動力にして、このような創造的な産物をこの世界に在らしめたのだと思った。そこから私は、「人間は創作することを宿命づけられた生き物である」と改めて強く思わされたのであった。同時に、それは私に大きな励ましをもたらした。

人間は太古から、この世界に何かを在らしめることを宿命づけられており、その宿命に自分も身を委ねたいと思った。全てを創作に捧げ、創作を通じて生きたいという思いを新たにすることができた。近い将来、エジプトには必ず足を運ばなければならない。その日は必ずやって来るだろう。2017/6/21